

48. 三井 康誠氏（株式会社三井ハイテック 代表取締役社長）

「ものづくりの歴史だけでなく、基盤が今でもあることが北九州市の財産。

最先端のものづくりで世界に発信し続けていきたい。」



三井 康誠（みつい やすなり）

北九州市出身。

東京大学大学院 工学系研究科修了。カリフォルニア大学バークレー校 経営大学院修了。株式会社三井ハイテック入社。金型事業本部長や技術開発本部長、常務、副社長を経て、2010年4月から同社代表取締役社長。

「最先端のものづくりで世界に発信」

北九州市の財産は、ものづくりの歴史だけでなく、基盤が今でもしっかりと残っているところだと思います。ものづくりのクラスターがあるからこそ、様々な企業と連携しながら、世界と戦うことができる工業製品を輸出したり、生産設備を各グローバル拠点に配置したりすることで、競争力を持って世界展開できていると感じています。

また、北九州市にはものづくりをリスペクトする文化があると思います。競争力の核となっているのは、「最高の設備」、「最高の技術」、そして、「最高の技能」です。「北九州マイスター制度」のように、技能に対して表彰する制度があるというのは、自分の努力が認められるという点で、とてもモチベーションにつながっています。

北九州市のものづくり企業は、はじめから世界を市場として見据えています。世界的に通用する製品を作ることができる企業を活かして世界と戦っていくこと、これが大切なのではないのでしょうか。

「情報産業など様々な産業の呼び込みを」

競争力を持って、世界と戦っていくためには、情報を集め、効率的にものづくりを行う必要があります。そのためにも、情報産業など様々な産業が必要となります。

様々な産業の呼び込みや学校・研究機関の活用は、行政がイニシアチブをとって、進めていただけるとありがたいです。

「ヒト・モノ・カネの最適な配置を」

北九州市には、五市対等合併という歴史がありますが、企業経営でも同じですが、今後は、力を分散させるのではなく、時代や環境に応じて、最適な形に再配置をしていくことが重要だと思います。

北九州市の七区には、響灘や平尾台、門司港レトロなど、それぞれ魅力的なところがあります。それらを活かして、それぞれの色を出した特徴的なまちづくりを進めていくとよいのではないのでしょうか。

「他市にはない魅力を活かした発展を」

新幹線の「のぞみ」が停まる小倉駅があり、博多まで15分で行くことができます。確かに、福岡市は商業都市として栄えており、勢いもありますので、その力を借りながら発展していくことも考えられます。

北九州市としては、どこにでもあるものは福岡市に任せて、超ローカルなものを極めていった方がよいのではないのでしょうか。且過市場などローカルなよいところがたくさんありますが、それぞれが個々にひっそりとやっている印象を受けますので、それぞれを繋いで、人を呼び寄せる魅力のある場所にできるとよいでしょう。

また、福岡市は土地が高騰していますが、北九州市では福岡市と比べて住宅や家賃が安いなど、生活費が安いところも魅力の一つだと思います。ただ、公共交通の面で、中心部と周辺部のアクセスに課題を感じていますので、そのあたりが改善されるとよいのではないのでしょうか。

ものづくりの面で言うと、昔から製鉄業の企業が24時間操業してきたことから、人々の夜勤に対する抵抗が少ない都市だと感じます。地元にいるとあまり気付かないかもしれませんが、夜勤に対する抵抗が少ないことは、最新鋭の設備を導入しても、夜勤により稼働率をあげることができるので、設備投資もしやすく、ものづくりのまちとしては、他にはない強みだと感じています。

「『ものづくり』のまちとして」

『ものづくり』のまちとして、産業が栄えていくことが重要だと思います。そのためには、世の中がDXなど変わっていく中で、新しいニーズに応えられるものを供給できるハードを作っていかなければなりません。

また、若年の間に、海外で活躍した技術者が年齢を重ねて北九州市に戻り、地元で活躍

できるようなまちになると、まちにとっても、その人の人生にとってもよいことなのではないでしょうか。北九州市の学校を卒業する学生も、卒業後、域外に出ずに地場で就職するようになると、その後も北九州市で生活の拠点を構えてもらうことが期待できます。最近では、IターンやUターン就職の方も多くなっていますが、住んでみると結構住みよいという声をよく聞きます。

子育ても含めて、安心して暮らせるまちになっていくことを心から願っています。